

終末医療と動物病院の役割

磯部芳郎[†] (いそべ動物病院院長)

動物病院の役割は何であろうか。

治療、予防、時には飼い主を指導する場所である。

また、動物病院は動物が終末を迎える場所ともなる。

最近、人の終末医療について話題になっている。

高齢化社会の中で医療現場では、患者に対する終末医療が課題となっている。

患者は自分の終末について、自身の意志を伝えていない(伝えられない)ことが大きな一つの理由である。意志を伝えている患者の約3%が延命を拒否し、約15%が延命を強く望んでいる。意志表示がない場合、現場の医師は、回復の見込みがなくとも1年でも2年でも治療を続けるかもしれない。家族にもそれぞれの考えがあり、結論は簡単に導けない。

このたび以下のように飼い主に文章にして差し上げたので、ここに紹介する。

なお、私の病院では、これまで色々な事柄を文章にして差し上げているが、このようなことも動物病院の役割の一部と考えている。

動物の死は何を教えてください

たくさんの動物の死を見てきました。

その死にも様々です。

食事中に死ぬもの、苦しみながら死ぬもの、寝たまま目が覚めずに死ぬもの、骨と皮だけになり朽ちるもの、過剰な治療で生かされた末ようやく死ぬるもの。犬や猫の寿命は、長くて20年です。

人間より命が短い動物ですから、飼い主がその死を看取るのは仕方のないことです。

悲しいことですが看取ってもらった動物は幸せです。

飼い主が先に亡くなられたケースも多く見えました。

飼い主に会いたがる犬の姿は可哀そうでなりません。一方で老犬だと貰い手がいないということもあります。

動物の医療も獣医師の考えによって様々です。

獣医師の話をよく聞き、理解し、それに従うのか。

自分の望む方法をお願いするのか、自身で決断することが大切です。

特に動物が不治の病にかかった時、何をしたら最良となるか、その終末を考えることが飼い主の務めです。

終末医療は、飼い主にとって重要な問題であり、獣医師も真剣に考えねばなりません。

その時、飼い主は動物から得た、生理的、心理的、社会的な効果を思い出すことでしょう。

動物を飼育することが人間の健康に良いという医学的な研究報告もあります。

特に子供にとって動物の存在は心を穏やかにし、気力を増します。一人っ子が家に帰り、迎えてくれる犬猫がいれば心は和みます。犬と散歩をすれば、一人で散歩するより、他人との会話も増えます。

可愛かった頃や、楽しかったこと、愛されていると感じた時…このような良い思い出は数えきれないでしょう。

飼い主はこのようなことを思い浮かべ、終末のあり方を判断するのではないのでしょうか。

一方、動物の死に直面した時、飼い主は改めて死生観を考える機会を得ることになります。

動物が、自分はどのような終末を迎えるべきか、考える機会を与えてくれるのです。

意思の疎通ができなくなれば、医療は延命に専念します。胃ろうを付ける、酸素吸入を行う、高カロリー点滴等を行う、導尿される、管つきの状態になる。

磯部芳郎

—略歴—

1962年 麻布獣医科大学卒業
1962年 国立予防衛生研究所勤務
1967年 藤井動物病院(横浜)勤務医
1969年 いそべ動物病院開業
現在に至る



[†] 連絡責任者：磯部芳郎 (いそべ動物病院院長)

〒203-0054 東久米市中央町4-8-10 ☎0424-71-0031 FAX 0424-71-3199

意思の疎通がないので自分の考えを伝えられません。
そこで動物の死から、改めて自分の終末における
意思の伝え方の重要性を理解します。

自分の考えを伝えるためには文章に残すことが大
切です。自らの意志を示したものがなければ、その
際、医師と家族は意見が相違し、争うケースも考え
られます。

自分の意思が文章として残っていれば、医師も家

族も、それを尊重してくれるでしょう。心安らかな
終末を迎えるためにも「自身の終末」のありようを
書き留めておくべきです。

人生を最後まで自分の意思で生きたという「証
し」としても書き残すことです。

このような機会をもつことも動物によって得られ
る恩恵の一つと言えるのではないのでしょうか。